

特106

392

廣田鐵五郎著

有利なる竹林經營法

大日本農業獎勵會發行

~~272  
393~~



始



例 言

○英人チャールズ、ホーム氏は嘗て「日本に於ける竹の用」なる一文を草して、「凡そ人類の利用する天産物中に於て、細大となく最も廣く百般の用に供し得らるべきもの、恐らくは復竹に及ぶもの、莫かるべし」と云ひ、又「竹は日本人の情人なり」とも云つた、味ふべき言葉である。

○寔や竹は、我國に於て太古より既に廣汎なる用途を有つて居た併して其用途たる、單に日常必須のものゝみならず、一例を擧ぐれば、中世に至つては武田信玄が竹束を用ひて攻城に奇功を奏したることあり、天文以降ポルトガル人に依つて鐵砲が邦人に傳へらるゝや、竹は又直に其纖維を火繩として用ひられた、

大 2. 3. 25  
内 交

殊に近世電氣燈の熾盛を來すや、米人エヂソン氏は、其炭纖として日本産苦竹の最も優良なることを發明し、目下盛に用ひられて居る、實に往くところとして可ならざるなし、とは眞に竹の謂であるらう。

○事態既に斯の如くであるから、其需用範圍は愈々擴大されるばかり、従つて收利も亦莫大であるに拘はらず、ある特殊の地方を除いては、我が邦人の竹に對して比較的冷淡なるは何故であるらうか、頗る怪訝に堪へない次第である。

○本書は畢竟之れ等栽培者の參考たらんことを期し、兼ねて之れが栽培を江湖に薦めんと欲するものである、従つて其叙述は可及的拮据なる學理を避け、徹頭徹尾實際の軌を逸せざらんことを期した。

○然は云へ吾人素より淺學菲才の一措大、加ふるに渺たる一小著、完璧は得て望むべからず、敢て大方識者の是正を乞ふ所以である。

○終りに大日本農業獎勵會が本書刊行の好意を深く謝す。

西武藏野の僑居に於て

大正二年三月

著者 識

# 有利なる竹林經營法

## 目次

第一章 栽培法	一
第一節 氣候及土質	一
第二節 竹材専用苦淡孟宗竹栽培法	三
一 仕立方	三
二 肥培及管理	九
三 收穫	二二
四 更新法	二六
五 收穫支	二七
第三節 孟宗筍栽培法	三三

一 仕立方	三
二 肥培及管理	三
三 更新法	三七
四 收穫	三七
五 收穫支	三九
<b>第二章 病虫害</b>	三二
<b>第一節 虫害</b>	三二
<b>第二節 病害</b>	三三
<b>第三章 有利なる竹林經營—結論</b>	三六

目次終

有利なる竹林經營法

廣田鐵五郎著

第一章 栽培法

第一節 氣候及土質

竹は溫暖地方に最もよく生育する植物であつて、元來東洋の原産又特産である、勿論寒地に於ても種類に依つては生育しないことはないが、斯かる地方に營利の目的で之れを栽培するのは考へ物である、予之れを聞く、日向、大隅地方の産竹は往々飯櫃として使用され、又ボルネオ邊の産には一節を以て桶、樽の代用をなすものさへあると之れ蓋し主として其氣候の好適なるに依るものであらねばならぬ、又本邦に於ても之れを事實に徴すれば、東北地方及北陸道の諸縣に於ては其産額の僅少なるを見る、之れ亦其氣候が主なる原因をなすのである。

第一節 氣候及土質

第一節 氣候及土質

○土質は稍砂礫を混じ、又は硅土質を含む肥沃なる壤土を好む、同一地方にありて其産竹に良否あるは、其手入管理の精巧拙に依るは勿論なれども、亦土質の選擇如何に依ることも亦決して些少ではない、然しながら斯くは云ふもの、極端なる砂土、粘土、過濕地、又は植物の生育し得ざる岩石地でない限り、大抵の土質に栽培して差支ない。竹林を新に仕立つる上に於て尙一の注意すべきものがある、而してそれは地勢である即ち第一作業上不便なる地位を忌むこと、例へば強き傾斜地、山顛等は肥料の運搬、竹材の搬出、等に不便であるから適當でない、殊に山顛の如き所は風害を受くるの不利がある、若し夫れ竹林として理想に近き地位を具體的に擧ぐれば、地勢東又は南に面する緩傾斜地にして、排水佳良なる地を最も可とするのである。更に苦竹、淡竹、孟宗竹三種の各々に就いて云へば、苦竹は土質、地位共に最も佳なるを欲し、淡竹は其次位にて宜しく、孟宗竹は最下位の地に於て尙良く生育するものである、但し孟宗竹にありては鞭根の潜入深さが故に、土壤も従つて深き場所を選びことが肝要である。

第二節 竹材専用苦竹、淡竹、孟宗竹栽培法

苦竹、淡竹、及び竹材専用の孟宗竹の栽培法は大同小異である、故に是處に其三種を併せて之れを叙述することとし其異なる點に對しては、其都度特に記すことにする、而して孟宗竹は筍採收用として、栽培せらるゝ場合も多いが、此場合其竹材を孟宗畑と云ふ。

一 仕立方

竹の仕立方に二法ある、即ち

- 1 母竹の栽植に依るもの
2. 隣接竹林より誘引するもの

て、母竹の栽培数は種類に依つて異同がある、之れを苦竹、淡竹、孟宗竹の三種に就いて云へば

苦竹——八十本（但し一反歩當り）

第二節 竹材専用苦竹、淡竹、孟宗竹栽培法

第二節 竹材専用苦竹、淡竹、孟宗竹栽培法

淡竹——八十本(同)

孟宗竹——六十本(同)

して其母竹は堀取の際に於いて充分母竹として優良な性質を具備したものを選ばねばならぬ、母竹は新竹がよい、其性質は各種の竹に就いて總て中庸なるものを選ぶを可とし優劣に過ぐるものは宜しくない、而して之を堀取るに當つては、先づ鞭根の方向を察地し、鞭根の方向は之れより生じたる枝の方向に依つて知ることが出来る、即ち枝の先端の向いて居る方向が鞭根の走つて行く方向である、但し枝の土中より抜け出すに當つて何等かの障碍物ある場合は此限りでない、して其土中に埋伏する深さは孟宗竹にありては地下三四尺、苦竹淡竹は之れより著しく淺く大抵三寸乃至一尺のところにあるのだ、其深さに應じて一尺五寸内外の長さには鞭根を附するやうに丁寧に掘り取り、鞭芽の健否をよく調べ、幹は下枝三四節を附して上部を切り去り、初めて栽植用に供するのである。

併し右の如き方法に依る時は莫大なる費用を要し何事にも摯實を貴ぶ農家の中には之

を以て一種投機的事業とさへ思ふものがある、然る場合には

他の簡易なる方法に依つて新に母竹を作るがよい、其法先づ五六月頃利刀を以て鞭根を一尺五寸乃至二尺の長さに切り、一坪に付凡そ十個を並べ、少しく灰を混ぜた細土に水を注ぎ、充分泥水を根に附着せしめて土を被ひ、日光の直射を防ぐ装置をなしおけば、六七月頃に至つて小笹の発生を見る、此際麥稈の類を敷いて根の幹かぬやにし爾後屢々薄き液肥を施せば、年内に細き鞭根を生じ、次年度には一株にて指大の竹三四本を生じ、漸次勢力を加へて良苗となる、之れを三年目に至りて下枝三四を残して上部を切り去り、一反歩に凡そ百五十株程植えるのである、此方法は前法の如く多額の費用を要するとなく、且一時に多數の繁殖を爲すことを得て非常に便利である。

栽植に際しては可及的  
表土を精耕する必要はある、之れ他の樹木に於ける殖林と異り一年も早く竹を発生せしめ収利を見る必要があるから、其法、土地を一尺内外の深さに耕し、鞭根發育の障碍となるべき木の根草の根を去り、又は開墾費用の莫大なるを一時節減せんが爲め

第二節 竹材専用苦竹、淡竹、孟宗竹栽培法

母竹を栽植すべき附近だけを一時耕しおき、次年より一二年の中に鞭根發育の程度を見計らひ全部耕耨を了るやうにするのである。

母竹栽植の時期に關しては、古來竹迷日、竹醉日、など、云つて陰曆五月十三日を佳とするが如く云ひ來つて居るが、之れは決して然か定まつた譯ではない、現今に於ては多く春三月及秋九月十月頃に行なはれる、兎に角大體に於て酷暑と酷暑を避ければ差支ない。

栽植の方法は、曇天又は降雨の日を選び、前述の如くして堀り取りたる苗を、深さ一尺五寸、廣さは鞭根の長短に應じて掘りたる穴に入れ、細土を被ひ、充分水を注いで株を揺り動かし、泥水を充分鬚根に附着せしめ、又土を被ひ、苗の風の爲に動かぬやう支柱を立て又は根際に三四個の石を置くのである、秘傳花鏡には次の如く記されて居る、竹を植うる者には好箇の参考となると思ふから、次に之を採録する。

「竹を植うるに四字の訣あり、疎、密、淺、深、即ち之を盡す、疎とは三四尺方に一

顆を種ゆるを謂ひ、其土虚にして、鞭を行るに易からしむるなり、密とは其根盤を大にし每顆須らく三四竿一堆なるべし其根密にして自ら相維持せしむるなり、淺とは土に入る甚だ深からざるなり、深とは種る時淺しと雖も、毎に河泥を用ひて厚く之れを壅すれば即ち深きなり」と、其栽植の深淺を説けるが如き、現今土入を手入の主なるものとするに考へ及べば、實に津々として盡さざる興味がある。

因に記す、孟宗竹は單純林となすよりも、苦竹との混淆林とする方利益である、之れ一には混淆林となす時は單純林の場合よりも一般に丈高きものを生ずるの利益あり且鞭根は孟宗竹に於て著しく深きが故、土地を利用する上から見ても利益多いのである。

第二法の

隣接竹林より鞭根を誘致して仕立てる方法は前法に比して資本を要すること甚だ少く且小區劃づゝ造林して漸次大竹林を構成するを得、收利も比較的早く見得るの利便あり

第二節 竹材専用苦竹、淡竹、孟宗竹栽培法



第二節 竹材専用苦竹、淡竹、孟宗竹栽培法

るが故に、何事にも摯實を貴ぶ農家の仕事としては極めて適當な方法である、其法、自己の所有地に隣接せる竹林ある時は其所有地の畑地なると山林なるとを問はず、隣接せる部分の土地を能く耕やし堆肥等の遅効肥料を施しおき、鞭根を誘致し、且筍の發生を促すのである、而して他の部分は依然從來の作付を續繼し、斯くして漸次竹林を展延せしめる、方法としても失敗の少ない極めて簡易なものである、由來農家の生活は手堅いと云ふことが一の得點であつて、假令家産が傾き始めても、竹の如き強靱性を持つて居て容易に折れて了はない、其代り一度挫折しては殆んど全く舊に復する希望はないのである、故に日常採るべき施業上の方針も假令利益は比較的少くとも失敗の少い方法を選ばねばならぬ、それには此第二法の如きは最も適當したものゝ一であつて、且其收利は決して尠少とは云はれない、然るに多くの農家が斯の如き場合多きに拘はらず、之れを利用することを成さず、自己の所有地に鞭根の潜入するを苦にして深い溝を掘るなど、無益のことに勞力を費やして居るのは愚てもあり、且は嘆はしき至りである。

二 肥培及管理

同一の氣候と同一の土質を有せる一地方にありて尙且竹材、筍等に優劣あるは主として肥培管理の方法其宜しきを得ると否とにあるのである。

肥料は人糞尿を主とし、其他麥稈、藁、塵芥、落葉等の廢物を利用するを可とし、處に依りて、竹林を一の塵芥捨場としてるところもある、而して其時期は人糞尿の如き速効肥料と、其他の遅効肥料とは之れを異にする、即ち

速効肥料は——七月下旬乃至八月下旬迄

遅効肥料は——十一月下旬乃至翌年三月迄

次に其分量は苦竹最も多きを要し、淡竹、孟宗竹にありては苦竹の八割内外で差支ない、之れを數にて示せば、

- 苦竹 人糞尿十荷内外 (但し反當り)
- 淡竹 同 八荷内外 (同)
- 孟宗竹 同 (同)

第二節 竹材専用苦竹、淡竹、孟宗竹栽培法

第二節 竹材専用苦竹、淡竹、孟宗竹栽培法

土入の効は又莫大である、即ち第一、遲効肥料の腐朽を促し、第二、地表を膨軟ならしめて鞭根の匍匐に便し、第三、肥料を供給する等竹林經營上一日も忘るべからざる作業である、して其の施し方は竹林の土質に依つて異ふ、即ち粘土質の竹林では土は所々に點々と一荷づゝちくのである、之れ鞭根は地中を上下波狀に蔓延するもので、其置土に向ひ肥料を吸収したる、鞭根は下部に向つて肥大となり、其根より産出する筍は大なるもの多く、従つて良竹を産するのである、次に礫土質の竹林にありては土を一面に一寸内外の厚さに敷き、礫礫中に混入し、地盤を堅固ならしむると共に兼ねて肥料とする、蓋し置土は肥料として又は土地の理學的性質を改善することに於て極めて効果大なるものである故、毎年之れを施せばそれ程のことはないが、費用も比較的多くを要するもの故、隔年位に之れを行ふこととし、且農閑にして賃銀の廉なる時を利用すれば最も經濟的である。

除草は五月下旬より六月上旬に一回、及盛夏中一回の二回に行ふがよい、之れ前者は落葉を拾ひ、且止り筍を發見するに便利であり、兼ねて拔きたる草は肥料ともし得

る、又後者即ち盛夏中に一回行ふときは、草根種子等絶えて次年度の雜草を少くするの利がある、但し成林となるに従ひ、竹葉鬱蒼として日光を遮ぎるに至るが故に、自ら雜草を生ずることも少くなり、除草の手数も減るのである、して斯うなつたなら盛夏に一回だけ行へばそれでよい。

竹林中の樹木も總て除去しなければならぬ、殊に栗、檜等の樹下には筍の生ぜぬものであるから大に注意を要する、總じて竹林中に他の雜木を混ずることは、根の蔓延に依つて鞭根の發育を阻害するのみならず、暴風の際には樹枝と竹竿と相磨して、爲めに價格を低落せしむる等の害がある、又假令雜木を混ぜぬ場合と雖、風害に對する注意は常に怠つてはならぬ、而して其最も風害の甚だしきは筍の將に成竹にならんとし、枝葉を生じた頃であつて、此頃強風に逢へば梢頭を折られ著しく竹の價値を減じ、又成竹にありても強風は其生育を害するものである、斯の如く風の害は大なるものであるが、然りとて之れを防ぐべく大した良法もない只是處に防風林を設くることは其豫防法の唯一のものである、而して若し扁栢、杉を以て竹林の籬となせば一方

第二節 竹材専用苦竹、淡竹、孟宗竹栽培法

第二節 竹材専用苦竹、淡竹、孟宗竹栽培法

他地面との境界となり、他方防風林の用をなして便利である、籬としては其他竹枝を以て作り、又は生竹を撓屈して作る所もあるが、後者即ち生竹を撓めたるものは病害に罹り易く且は病害蔓延の媒介をなす場合が多いから、決して有利な方法とは云はれない、要するに籬としては特殊又は自然的の防風装置なき場所では常緑針葉樹を以て作るを得策とし、風害の虞なき處では竹枝を以てするが最も良法であらう。

大雪に際しては雪折れを生ずること多きが故、之れに對する注意も亦怠ることは出来ない、して北陸地方の如く雪多き國では藪巻と云ふ方法を行つて居る、これは十坪位の地積に於ける生竹を地上五六尺の處から繩で一把握として梢端まで巻き付け、圓錐形として雪を防ぐのである、但し關東以西の、雪概して多からざる地方では、降雪の際伏せるもの、雪を拂ひ落すことに勉むればそれで澤山である。

竹林管理の中、病虫害に關するものは後に一項を設けて叙べるつもりである。

三 收 穫

竹林收穫物の主なるものは云ふ迄もなく竹材である、竹材は四年生以上の物に就いて

擇伐するのであつて、普通五年生乃至六年生を最も可とする、けれども決して過度に切つてはならぬ、竹竿疎に過ぐれば微風にも搖動して根莖を弛め、或は日光射映の爲め乾燥し、自然に節の高い瘦せ竹を生ずるものである、要するに竹材の密度としては一反歩當り

苦竹——五百本乃至八百本

淡竹——八百本乃至千二百本

孟宗竹——四百本乃至七百本

を常に殘生せしむる如く伐るのが最も適當である、而して

伐採の適期は八月乃至十月で、此時期は竹に水分少く従つて將來虫害に罹ることが少い、伐採の方法は大なるものは鋸、小なるは鉋を用ひ、切口には孰れも幾度も鉋を入れて腐朽に容易ならしむるやうにしておく、次に伐採したれば枝を落すのである其法、枝の基部を幹に沿ふて梢頭に向ひ、枝切鎌、鉋等にて疵を付け、更に刀背部を以て逆に拂ふのであるが、此作業は中々熟練を要するものであつて、若し過つて皮を剝

ぐやうなことがあつては、竹材の價値を著しく減ずるもの故大に注意するが肝要である、枝を拂つたらば結束するして其  
 結束法には一定の規定があるが、それも竹材の種類に依つて異ふのである、即ち苦竹及び淡竹にありては、

胸高周圍	一束に要する本數
一尺二寸	一本(即ち一本にて一束)
一尺一寸	一本二分五厘
一尺	一本半
九寸	二本
八寸	三本
七寸	四本
六寸	六本
五寸	十本

四寸 十六本  
 四寸以下 周圍三尺繩を以て一束とす  
 孟宗竹にありては

一尺三寸	一本
一尺二寸	一本二分五厘
一尺一寸	一本半
一尺	二本
九寸	三本
八寸	四本
七寸以下	周圍三尺繩を以て一束とす。

以上は竹林經營の主産物である。而して其副産物としては、筍、籜、竹枝の三種であつて、其收入も決して少いと云へない。  
 竹材を主とする竹林經營にありては、筍は強健なるものを採收することはならぬ、故

第二節 竹材専用苦竹、淡竹、孟宗竹栽培法

に先づ將來良竹となるべき見込なき  
 止り筍を鑑定し、之れのみを採收するのである、して其鑑定法は、熟練者によりては  
 一見之れを鑑別し得れども、最も安全なる方法は筍の七八寸に生長せし頃之れに等し  
 き高さの目標を立ておき、二三日を経て毫も伸長せぬもの又は其遅々たるものを止り  
 筍として掘り取るので、由來この止り筍となる原因には二種ある、即ち一鞭根より  
 發筍過多に失したる爲、優勝劣敗の理に依り劣者となりたるもの、及び筍の尖端に害  
 蟲の蝕入りたるもの之れである。而して後者は孟宗竹に多い。  
 籜及び竹枝の需用も中々廣くして、収入も亦相當にあるものである。

四 更新法

荒廢せる竹林又は其繁殖を自然の儘に放任せる竹林にありては、發筍減少し、結局收  
 支相償はぬこととなる然る場合には當然該竹林の更新を圖る必要が起るのである、但  
 し施肥土入等の管理法其宜しきを得れば強いて更新するの必要はないのであるが、斯  
 くては巨額な費用を要するのみならず、其結果も少費なる更新法の優れるに若かない

次に其方法を述べんに、最も普通にして且有効なる方法は  
 短冊形更新法である、其法傾斜地にありては傾斜面に直角に、平垣地は南北方向に幅  
 二間乃至三間づゝ區劃し、一區劃づゝを隔て、竹を伐り拂ひ、丁寧な耕耨して竹根、  
 雜草等を除去し、之れに堆肥塵芥の如きものを混じて兩側の伐り残したる竹林より鞭  
 根を誘致し是處に新しき竹林を構成する、斯くして新林の完成するを俟ち、更に伐り  
 残したる部分の更新を行ふのである。

五 收支

比較的僅少なる手数を資本とを以てして其收利の大なる、農業上竹林經營を措いて他  
 にあるまい、併し之れに就いては尙章を改めて論ずるつもりであるから、今は只其成  
 林に於ける各竹栽培の收支のみを掲げる。

因に以下掲出する處の表は京都府農會の調査に成るものである、誰も知る通り、山  
 城地方は本邦第一の竹産地であつて、其施業の懇切なることも亦他に其比を見な  
 い、従つて其資本(支出)の如き比較的多額に上るのであるが、参考者にとつては之

第二節 竹材専用苦竹、淡竹、孟宗竹栽培法

第二節 竹材専用苦竹、淡竹、孟宗竹栽培法  
 れを資本の最大限と見得るの便宜がある。  
 苦竹林收支

収入(一町歩當り) (但價格は最近五ヶ年の平均)

種目	收量	單價	價格	備考
竹材	百駄	三、四〇〇	三、四〇〇	
竹枝	三百貫	〇三五	一〇、五〇〇	
籜	荒籜 百五十貫	三〇〇	四五、〇〇〇	
止り	籜枝 二十貫	九〇〇	一八、〇〇〇	
計	四十貫	〇七五	三〇、〇〇〇	
肥料	二千貫	〇二四	四八、〇〇〇	(人糞尿)
計			四四三、五〇〇	

敷草	千五百貫	、〇二三	一九、五〇〇	四ヶ年に一度六千貫か施すものとして
土砂	二千荷	一荷約十六貫、〇〇六	一二、〇〇〇	四ヶ年に一度八千貫を施すものとして
施肥除草人夫	男 十人	、五〇〇	二一、二〇〇	
筋堀皮拾	女 六人	、二七〇	一五、〇〇〇	
伐竹費	百駄分	、一五〇	二〇、〇〇〇	
租税及諸負擔			五、〇〇〇	
計			一四〇、七〇〇	

收支差引純益金參百〇貳圓八拾錢 (但し一町歩)

淡竹林收支

収入(同前)

種目	收量	單價	價格	備考
竹材	七十五駄	三、四〇〇	二五五、〇〇〇	
籜 (荒籜)	百貫	、二八〇	二八、〇〇〇	

第二節 竹材専用苦竹、淡竹、孟宗竹栽培法

第二節 竹材専用苦竹、淡竹、孟宗竹栽培法

二〇

種 目	數 量	單 價	備 考
竹 枝	二百八十貫	〇六〇	一六、八〇〇
止 り 筍	五百貫	一四〇	七〇、〇〇〇
計			三六九、八〇〇
種 目	數 量	單 價	備 考
肥 料	千四百貫	〇二四	三三、六〇〇
敷 草	千五百貫	〇一三	一九、五〇〇
土 砂	二千荷	〇〇六	一二、〇〇〇
施 肥 除 草 人 夫	男 四十人 女 四十人	、五〇〇 、三〇〇	一五、八〇〇
伐 竹 費	七十駄分	一五〇	一〇、五〇〇
租 稅 及 諸 負 擔			一八、〇〇〇
雜 費			五、〇〇〇
計			一二四、四〇〇

苦竹林より所得税少きによる

孟宗竹林收支

收 差引純益金貳百五拾五圓四拾錢(但一町步當り)

收 入 (同前)

種 目	數 量	單 價	備 考
竹 材	百二十駄	二、五〇〇	三〇〇、〇〇〇
籜 (荒籜)	二百貫	〇七〇	一四、〇〇〇
竹 枝	三百六十貫	〇三〇	一〇、〇〇〇
止 り 筍	三百貫	一〇〇	三〇、〇〇〇
計			三五四、八〇〇
種 目	數 量	單 價	備 考
肥 料	千四百貫	〇二四	三三、六〇〇
敷 草	千五百貫	〇一三	一九、五〇〇

苦、淡竹と同じ

第二節 竹材専用苦竹、淡竹、孟宗竹栽培法

二一

第三節 孟宗筍栽培法

土 (土用入)	二千荷	〇〇六	一二、〇〇〇	同
施肥、除草人夫	男 四十人	、二七〇〇	一五、〇〇〇	
筍堀、籜拾	女 四十人	、一五〇〇	一八、〇〇〇	
伐竹費	百二十駄分	、一五〇〇	一八、〇〇〇	
租税及諸負擔			一八、〇〇〇	苦竹林に比し所得税少き故
雜費			三、〇〇〇	諸害に對する保護苦淡竹より少きによる
計			一二、四〇〇	

收支差引純益金貳百四拾貳圓四拾錢(一町步當り)

第三節 孟宗筍栽培法

筍採收の目的を以て孟宗竹を栽培せんとするものは、自家食用としてならば知らず、苟も收利の目的を以てする場合には、充分其土地の經濟的事情に鑑みねばならぬ、即ち大都會の近傍又は搬出上の便宜ある地てなければならぬ、經濟的地形の選定を過つた筍栽培には何等の收益も伴はない、注意すべきである。

一 仕立方

仕立方は前節に述べたところと略く同一である、只母竹堀取を春期に行ふ時は筍の發生を害するが故に、主として秋期に行ひ、且つ其鞭根を苦竹其他よりは少しく長く即ち二尺内外を附し、之れを植栽する本數も、筍畑にありては陽光を地上に透射せしめて土地を溫暖ならしむる必要あれば、一反步三十本内外を限度とする又開墾に先立つての開墾耕勸は鞭根の潜伏深さに依り従つて耕起も二尺以上の深さを要するのである。

二 肥培及管理

筍は比較的少量の肥料を要するものにして、肥大なるものを多量に得んと欲せば、尤も此點に留意せなければならぬ、而して肥料を林中に施與するに當つて最も緊要なるは、眼中竹を存せざること之れである、と云ふと一寸奇妙に聞えるかも知れぬが、一體竹根は林中に縦横錯綜するもので、一母竹の許にある筍も未だ必ずしも該母竹の所生なりと斷言することは出来ない、反つて其眞の母竹は遠く數尺乃至數十尺を隔



てたる所に存在すること敢て珍らしい事實でない、故に施肥する場合には其地表に樹立せる竹のみを以て標準とは定め難い、即ち竹なき處でも根の蔓延に適すれば縦横無盡に地下を網羅せるを以て、單に地面を標準とし、平等に穴を穿ちて之れを施給するやうせなければならぬ。次に其肥料は人糞尿を第一とし、草肥をも併せ施すのであつて、

○施肥の時期は筒堀取後又は寒中を可とし（筒堀採の際其穴に直に施せば新に穴を堀る手数が要らぬとして此方法を採る地方もある）林中各所に於て二三尺の距離に一個づゝ穴を穿ち、之れに一升杓に人糞一杯づゝを注入し、然る後之れに土を覆ひ、草肥は薄く疎密なく撒布するのである。

○而して實驗者の言に依れば、草肥と人糞とは筒發生上至大の關係を有するもので、所生筒の肥大如何は草肥施與の多寡に比例し、又分量の多少は人糞に比例すと故に人糞と草肥とを多量に施すことは、取りも直さず肥大なるものを多量に穫る所以であるから、栽培者は大に此點に注意せねばならぬ。

○前述の如く草肥を林中に均布したる時は之れに土入をする、土入は草肥の露出せざるやう均布するを法とし、一反歩八百荷乃至九百荷（一荷平均十六貫位のものを施すのである）

○筒畑は立竹の數非常に少きが故、従つて雜草の繁茂すること多く、除草も頻繁丁寧なるを欲する、して其時期は六月より十月頃迄を可とする、又鞭根地表に露出する時は、其部分より小枝を生じ、鞭根の發育を害して筒の發生をも少からしむるもの故、除草の際注意して此小枝は切り取るのである。

○尙是處に孟栽培上閑却すべからざる一事がある、母竹に對する管即ち之れである、一體孟宗畑は栽植後一ケ年即ち栽植の翌年には普通筒を生じない、翌三年目には一本が多くて二本を生ずる、此際二本共成竹せしむる時は鞭根に害があるから一本は堀取り、四年目には一反歩十本乃至十五本、五年目には同じく約三十本を各々成竹せしめ、斯くして翌六年目に至れば成竹の數凡そ百本内外に達するから、右の如く殘存成竹せしめたるを母竹として、最初栽植したる母竹

を總て伐採し、以後毎年健全にして勢力中等なるものを十本内外づゝ残して、母竹の老齡なるものより漸次輪伐を行ひ、常に一反歩百本内外の母竹を殘存せしむるやうするるのである、即ち孟宗畑は六年にして完成し、一定の收入あるに至るのである。

母竹となすべき筍は、其二乃至三節より枝を生じたる際竹棹の先に鎌を結び、十二三節の枝を殘すやう見計らつて梢頭を切落すのである。

孟宗畑は

風害を感ずること特に大であるが、之れに近接して防風林を設けることは、林地に陰翳を生じ、筍の發生を少なからしめ、又生育をも阻害するもの故面白くない、故に土地選定の當初に於て可及的風當りの少き場所を選ぶべきである。

梢頭切斷しあるが故に雪に對する抵抗力は強い。

孟宗畑には普通籬を作らぬけれども、其代りに、

排水溝を堀るがよい、これは單に其境界となるばかりでなく、排水を佳良ならしむる利益がある、蓋し孟宗竹の鞭根は地中深く潜在するが故、過濕に失する時は鞭根の發

育を害し、延いて筍の發生を少なからしむる不利がある、て此爲には又其栽植の當初に緩傾斜地を選む必要もある。

三 更新法

前項に述べたる母竹輪伐法は云ふ迄もなく一種の更新法である、が併し竹林の極端に荒廢して母竹の疲憊せる場合には勢ひ前節に記したる根本的な更新法を執らねばならぬ、然は云へ若しも土入用の土砂を同竹林の一方より順次堀り用ひ、其跡地に堆肥の如きものを施し鞭根を誘致すれば、ある年數の中に全部の更新が出来る譯である、この方法は世人の知る如く便利で且經濟的である、此場合隣接竹林より鞭根を誘致して作りたる孟宗畑にありては其古き部分より更新を初め、母竹の栽植に依るものは其南端より始めるがよい。

四、收穫

收穫の主なるものは云ふ迄もなく筍で、年々輪伐する母竹、竹枝、籬は竹材専用の竹林よりは其收量が遙に少い。

第三節 孟宗竹栽培法

筍は其頂端少しにても地表に露はるゝ時は、皮に毛茸を生じ大に市價を減ずるものである、故に其未だ地表に露出せざるに先立ちて堀取ること最も肝要である、即ち筍の地表に出でんとするや、少しく龜裂を生ずるを以て之れを検して堀取るので、其鑑別法は竹又は鐵製の筍を龜裂上より土中に差込み、筍の有無を検するので、斯くせぬ時は往々鞭根の爲に龜裂を生ずることもあるから、知らずく之れを傷つくる虞れがある、總じて筍は堀取の時期早きほど其價高く、甚しき場合には僅々一日後るゝも其價格に著しき徑庭を見るものであるから、栽培者は特に深大なる注意を拂はなければならぬ。

斯くして竹を堀取る時期は必ず早朝を以てし、其筍の頂端の方向に依りて母根の孰れにあるかを察知するのである、蓋し母根は大抵頂端の彎曲せる方向に當りて存在するを以て母根を傷けざるやう、鶴嘴様器を以て堀り取るのである。筍の價格は東京横濱の市場にありて春彼岸頃には一貫目一圓内外を稱ふるも、漸次下

落して五六錢に至るが常である、以て筍採收の早晚が如何に價格に關係あるかを知らしめ得やう。

五 收 支 收入(但し一反歩當り)

種 目	收 量	單 價	格 備	考
筍	四百五十貫	一五〇	六七、五〇〇	早、中、晩平均價格にし
竹 材	一駄半	七〇〇	一、〇五〇	
竹 枝			二五〇	
竹 籜			一〇〇	
計 支 出			六八、〇〇〇	

種 目	數 量	單 價	格 備	考
肥 料	七百貫	〇二四	一六、八〇〇	

(人糞尿)  
第三節 孟宗竹栽培法

第三節 孟宗竹栽培法

敷	八百貫	、〇一三	一〇、四〇〇
(下草)			
土置	八百荷	、〇〇六	四、八〇〇
土置人夫	男 一 女 一	、二七〇〇	、七七〇
除草人夫	男 六 女 四	、二七〇〇	四、〇八〇
施肥人夫	一 人	、五〇〇	、五〇〇
伐竹人夫	一 人	、七五〇	七、五〇〇
筒堀取人夫	男 十 人	、七五〇	三、五〇〇
租稅及諸負擔			三、〇〇〇
雜費			農具損料、管理費其他
計			五一、三五〇

收支差引純益金拾七圓五拾五錢  
 右は前節と同じく京都府農會の調査にかゝるものであるが、予は嘗て京濱市場に筒を供給する主要なる栽培地武州都筑郡中川村に於て其支收を調査して見たのに次の如き結果を得た。

三〇

收入 金五拾貳圓五拾錢也

筒參百五十貫目代(一貫目平均十五錢)

支出 金參拾圓也

内  
 金拾壹圓參拾錢 肥料代  
 金拾參圓五拾錢 人 夫 賃  
 金五圓貳拾錢 雜 費

收支差引純益金貳拾貳圓五拾錢也

第二章 病 蟲 害

第一節 蟲 害

竹の害蟲には他の農作物に於けるが如き大害を及ぼすものは無い、それに其侵害を受けるのは多く筒時代に於てである、即ち針金蟲又は夜盜蟲が筒の梢頭部又は中腹

第一節 蟲 害

から蝕入つて所謂止り筍として了ふ、之れを驅除するには専ら止り筍を採掘し且該蟲の捕殺に勉め、又は蕪菁、馬鈴薯の如きものを土中に埋めて、似て幼蟲を誘殺するのである、而して成蟲は可及的捕殺に勉め、又は亞硫酸に黒砂糖を混じたるものを林中各所に塗りて成蟲即ち蛾を誘ひ、之れを捕殺するのである、彼の點火誘殺法は共同にて行へば效能があるものであるが、竹林には斯くすべからざる諸多の事情があつて到底共同苗代に於けるが如くすることは出来ない、斯かれば此方法は寧ろ實行せぬ方が安全である。

### 第二節 病害

竹の病蟲中最も恐るべきは自然枯病である、殊に淡竹の如きに至つては、其慘害一時に全林に及び、百年の苦心になるどころの大竹林も一朝にして全部の大更新を行はねばならぬやうな大損害を蒙るものである、現に京都府靜岡縣等を主とする各縣に於て、多少なりとも此害を蒙ら

ぬところは無い、而して此病害は最も淡竹に多く、孟宗竹にありては假令其侵害を受くるも大抵林中の三四本に止まり、一舉全林に及ぶと云ふやうなことは今の所先づ以て無いと云つてよ。

次にこの自然枯病なるもの、原因に就ては、随分種々の説を立てるものがあるが、現今多くの學者の説は、竹林に於ける肥料の不足、夏季の早魃、空氣及び土壤の乾燥等竹が其生育に不適當なる周圍の状態に遭遇し、爲めに開花に依りて子孫の繁殖を圖るの必要を生じ、而して開花すれば當然禾本科植物の特性として枯れるのであると云ふに一致して居る、故に此害を未前に防がうとするには、要するに如上諸多の原因を近寄らしめぬにある、即ち其方法としては、竹林には少くとも隔年位に敷草、土入を行ひ、早魃に際しては澆水の便利あるところは灌漑を實施し、筍の發生稀少となり、開花の前徴見えたる時は速に肥料を施さねばならぬ、又既に花芽を生じたる竹ある時は速に之れを伐除がなければいけな。

尚以上の外、竹林の疎密を適度にする、老竹は速に伐採すること、更新法を實

行すること、等も亦豫防上須要なる事項である。次に天狗巢病に罹つた徴候は、細長き枝が密生して蔓状をなすからして直に之を鑑別することが出来る、而して本病は一種の黒穂病菌の寄生に基くものであつて、其蔓延は自然枯病の如く甚しくはないが、併しやはり相應の豫防策を講ぜぬ時は、該菌に侵された竹は漸次彎曲して竹材としての價值を減ずるのみならず、勢力減衰するが故に筍を發生せず、遂には全林をして枯死せしむるの慘害を醸すものである、而して之が豫防乃至驅除の方法としては、前章に於て述べし如く生竹を撓めて籬を作ることなく老竹は順次伐採し、殊に其害を被むれる竹ある時は容赦なく伐除し、且其枝葉を燒却せねばならぬ。

以上述べしもの外、又水枯病と云ふがある、之は地上より約三十節許りの間に毎節水を有し、竹葉漸く枯凋し、枝幹は漸次暗褐色遂に黒褐と變じ、材質脆弱使用に耐えぬものとなるのである、而して之れも亦一種の黴菌の作用に依るもの故發見次第伐採せねばならぬ。又

一竹の赤銹病菌の寄生に依るところの病氣がある、四五月頃竹幹の地上一二尺迄の間に黄褐色をなせる冬胞子の塊をなす、此病に侵されると竹の勢力減ずるが故に筍細小となり、従つて劣等なる竹林と化する、其驅除豫防法は矢張り被害竹を見當り次第切り拂ふに如くはない。

煤病は多く淡竹、布袋竹等に發生する、一種の黒穂病菌の寄生に原因し、葉面枝幹等恰かも煤烟を塗つたやうになる、此病菌に侵されると生理的作用を阻害され結果として勢力減衰するが故に、被害竹の伐採又はボルドー液の撒布等に依つて其驅除豫防に勉める必要がある。其他

葉枯病と云つて短時間に葉枯凋し竹幹をして枯死せしむる病氣があるが、孰れにしても發病の徴候あるものは速に伐採して病害の蔓延を豫防することが必要である、殊に發病の當初にありては竹材の價值にも大なる關係を及ぼさぬものであるが、病勢進むに従ひ全く使用又は販賣に耐えざるものとなる故、經濟上からも大に考慮を要することである。

### 第三章 有利なる竹林經營——結論

以上予は竹の栽培法及び病蟲害の大異を叙述した、筆は常然竹の經濟的關係に及ばねばならぬ、前にも述べし如く農家の仕事は可及的穩健摯實なるを欲する、假令利益は徐々として來るとも、資本を一時に多く投下して一時に莫大な利益を貪らんとするが如き投機的なものでなく、資本の投額も亦少しづつ徐々なるを欲する、然らば竹林經營は何うであらう、今次に新に竹林を仕立る場合、第一年の一反歩當り費額を擧げて見れば、

費額	費目	單價
一二、〇〇〇	開墾費	〇四〇(一坪に付)
一二、〇〇〇	母竹八十本(堀取運搬共)	一五〇(一本に付)
二、〇〇〇	母竹植付人夫四人	五〇〇(一人に付)

### 有利なる竹林經營法

一、六〇〇	母竹支柱代	〇三〇(一束に付)
九〇〇	藁三十束	六〇〇(一荷に付)
一、八〇〇	人糞尿三荷	
三、一二〇	男三人施肥、除草、藁敷其他管理人夫	
六、〇〇〇	借地料	
三九、四二〇	合計	

(京都府農會調査以下同じ、淡竹にありては藁十束三十錢を増し、借地料に五拾錢を減す)

孟宗竹にありては、

費額	費目	單價
一五、〇〇〇	開墾費	〇五〇(一坪に付)
一〇、二〇〇	母竹六十本(堀取運搬共)	一七〇(一本に付)
二、〇〇〇	植付人夫四人	五〇〇(一人に付)

### 第三章 有利なる竹林經營——結論

一、二〇〇	母竹支柱代		
、九〇〇	藁三十束		〇三〇(一束に付)
一、八〇〇	人糞三荷		六〇〇(一荷に付)
三、一二〇	男三人施肥、除草、灌漑、其他管理人夫		
五、〇〇〇	借地料		
三九、二二〇	合 計		
孟宗畑即ち 筍 採收用の孟宗竹林にありては、			
費 額	費 自	單 價	
一五、〇〇〇	開墾費		〇五〇(一坪に付)
六、八〇〇	母竹四十本		一七〇(一本に付)
一、二〇〇	母竹支柱代		
、九〇〇	藁三十束		〇三〇(一束に付)
二、八八〇	人糞尿白二十貫		〇二四(一貫に付)

三九、一三〇 合 計

五、三五〇  
七、〇〇〇

男八人施肥、除草、母竹植付、灌漑其他入夫  
借地料

以上示すが如く、資本と云へば僅々四十圓に足らぬ費用を以て一反歩の經營を成し得るので、それも母竹と土地が自分のものであれば、他は殆んど全く普通作物に於けるが如く單に農家自身の手數を要するだけである、而して此手數なるものは、農家は殆んど收支の計算に入れて居ない、若し之れを嚴重に計算する場合に於ては農家の所謂收入なるものは現今農家が考ふるところのものより甚しく僅少となるに違ひない、此意味に於て予は何時も、自作農も亦日傭取と同じく一種の手間賃取りに過ぎないと思ふのである、それは兎に角斯かる僅少の資本を以てして、數年又は十數年を出てざるに、普通農業に見る能はざる巨額の收入があると云ふのは、農家に取つて一大福音ではあるまいか、近來竹林經營の漸く盛ならんとする傾向あるは強ち理由の無いことではなから。



而して竹林収入の如何に大なるかを見んには他の作物と比較して見れば一目瞭然たることである、先年神奈川県農事試験場に於て經濟試験を實施したことがあるが、馬鈴蘇、葱頭、胡瓜、南瓜四種の中で最も純益多きは南瓜の二十九圓四十二錢五厘であつた、即ち其収入未だ苦竹の及ばぬのである、農事中最も利益多しと思惟せらるゝところの蔬菜園藝に比する既に斯の如くである、況んや他の普通作物に於ておやだ。殊に施業の收約的なる蔬菜の如きに至つては、其収入の大なれば大なるほど大なる勞力を要し、一農家の勞力を以てしては到底一町歩二町歩の大栽培を爲すことは不可能であるが、竹林に於ては然うでない、殊に其作業は多く農閑を利用し得る便宜があつて、一の副業として悠々之れを實施し得るに於ておやである、筆を擱くに當つて予は竹林業の愈々盛ならんことを祈るのである。

有利なる竹林經營法終

大正二年三月十日印刷  
大正二年三月十八日發行



神奈川縣都筑郡中里村字下谷本千二百六十三番地

著者 廣田鐵五郎

東京市芝區愛宕町二丁目十四番地

發行者 西野善吉

東京市芝區愛宕町二丁目十四番地

專務理事 横須賀寅吉

東京市芝區愛宕町二丁目十四番地

發行所 大日本農業獎勵會

東京市京橋區南佐柄木町二番地

印刷人 岩本菊雄

東京市京橋區南佐柄木町二番地

印刷所 岩本活版所

272  
593

終

